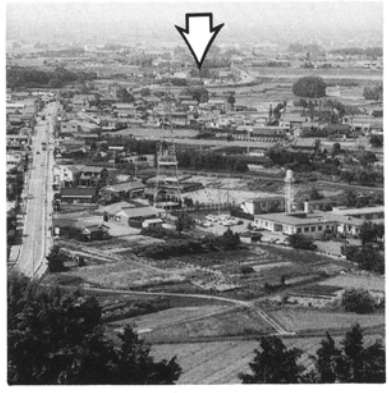
志　貴　野　遺　跡

1．位置及び地形

志貴野遺跡は、従来の分布調査により「中原遺跡」と仮称されていた。しかし、近年の詳細な分布調査により、同遺跡が古代を中心とする遺跡で、西尾市中原町よりむしろ隣接する志貴野町を中心に分布していることが明らかになり、改めて「志貴野遺跡」としてその調査を進めるに至った。本年度の調査は、国道23号線バイパス工事に先立ったもので、3000m²を２ヶ所（Ａ・Ｂ区）に分割して実施した。



遺跡遠景（南西より）

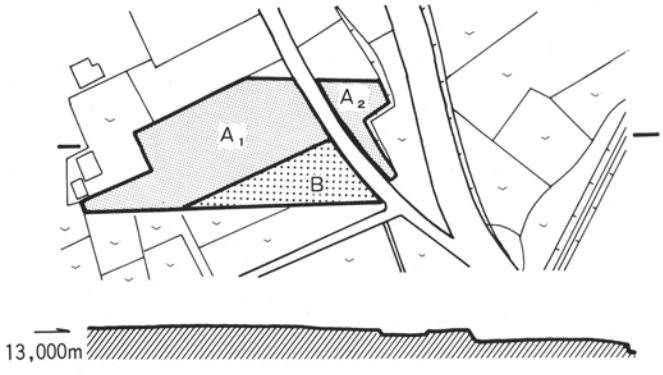
遺跡の所在地を地形的に見ると、矢作川（古川）右岸の『碧海台地』と呼称されている洪積台地縁端部に立地している。遺構検出面の標高は、13ｍを測り、この上面に厚さ20cmの包含層が覆っている状況である。遺跡の現在地目は、畑地となっている。

なお、遺跡の全面に展開する低地は、現状では水田として利用されているが、これは矢作古川堤防の整備が進むにつれて耕地化したもので、遺跡活動期には現状程安定したものではなく、湿地様を呈していた状況にあったことが、本年度実施の試掘調査により確認されている。

調査の成果は、後述する通りであるが、検出された遺構の状況から、本年度の調査区は居住域中心付近を占めていると考えられる状況にある。このようなまとまった形で検出された古代の集落遺跡は、西三河地方においては初例であり、今後、集落遺跡研究の好例になり得ると考えられる。

2．遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑・溝などが見られ、調査区が居住域にあたっていることが考えられる。検出された遺構は、年代的に見るとほぼ古墳時代後期（Ⅰ期）とほぼ平安時代（Ⅱ期）の二時期に見られる。



第１図　志貴野遺跡位置図

これらは、調査区全域に一様の分布状況を呈しているのではなく、特に調査区中央を横切る市道より北方に分布の濃い部分を認めることができ、この地点より南北は徐々に薄くなっている。今回は遺跡を概観するにあたり、これらの遺構のうち、竪穴住居と掘立柱建物についてのみ記述する。

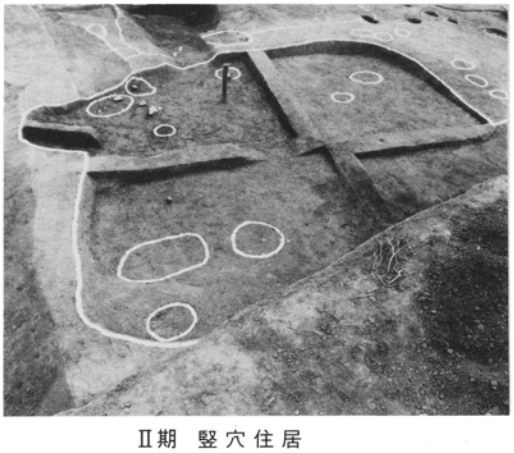
遺構近景（南より）

なお、A区のうち北東部分、面積50％程度については、遺跡が確認される以前に、遺構検出面となっている碧海台地面を20～30cm削る程度の、耕作に伴う深掘りを受けており、例えば竪穴住居のような掘り込みの浅い遺構は、すでに消失していると考えられる状況にあったことを付記しておく。

〈竪穴住居〉

竪穴住居は32軒検出された。時期的にはⅠ期が29軒、Ⅱ期が３軒である。Ⅰ期の住居は一辺４ｍ程度の隅丸正方形で、遺構検出面からの掘り込みは20cm程度で、床面に直径30cm程度の主柱穴を四ヶ所有する形状が一般的である。床面の周囲には、幅20cm程度の周溝を有しているものも見られる。なお、北側もしくは東側には、幅20～30cm、長さ30～40cm程度のわずかな突出部を有しているのが通例である。この部分は埋土に焼土・炭化物が大量に見られ、時にはスサ入りの焼土塊をも含むもので、床面に被熱している部分も見られるため、カマドであったことが考えられる。Ⅱ期の住居は、Ⅰ期のものに比較して、平面形が概して小さく、やや不整形なものも見られる。床面の周囲には、Ⅰ期と同様の周溝を有している場合もある。カマドはⅠ期と同様のものも見られるが、検出できない場合もある。

Ⅰ期　竪穴住居



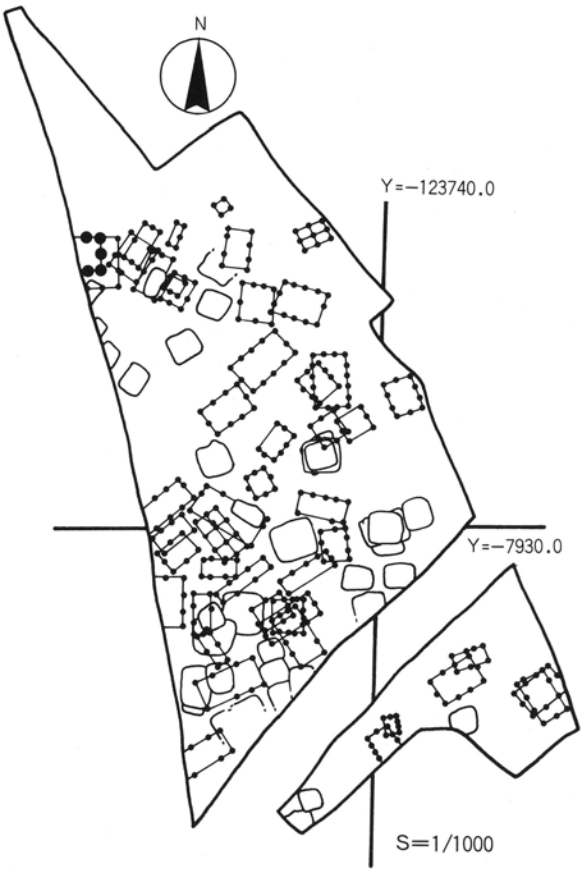
Ⅱ期　竪穴住居

これらの分布状況は、調査区全域に一様に展開するのではなく、複雑に切り合う部分を南・北両側にそれぞれ見ることができる。つまり、Ⅰ期の竪穴住居は特定の地区に数次に建て替えられたのに対し、周囲に全く竪穴住居の検出ができない地区が存在するという、極端とも言い得る状況を形成している。これをさらに調査区内の耕作時に深掘りを受けた部分に竪穴住居の存在を想定すると、直径30m程度の、結果として円形分布も考えることもできる。しかし、この状況は、Ⅱ期においては見ることはできず、数軒の住居がⅠ期の密集域とは無関係に分布している。つまり、Ⅱ期の竪穴住居は、Ⅰ期のそれとは若干異なった概念のもとで展開していることが考えられる。

〈掘立柱建物〉

掘立柱建物は46棟検出できた。これらの大半は、規模が２×３ないし２×４程度で、庇は有さない形態をとる。なかには、柱通りの悪いものも数例見られる。柱穴の掘り方は円形が最も多く、検出面で直径30cm～40cm、深さ50cm前後のものが大半で、小規模である。しかし、これらのうち１棟のみ大型の建物が検出されている（以下、大型掘立柱建物）。この建物はＡ区の北西部に検出されたもので、桁行は調査区外に達し、規模は不明であるが梁行は6.7ｍを計る。形状は、東・西・南にそれぞれ庇を有するものであったと考えられる。柱穴の規模は、検出面で母屋部分がプラン隅丸正方形で、一辺100cm、深さ60cm、柱痕径20cmを計るのに対し、庇部分はプラン円形で、直径60cm、深さ30cm、柱痕径15cmであり、調査区域内では、他の掘立柱建物とは格段の差を有していると説明しても大きな矛盾は見られない状況である。

次に、これら掘立柱建物の時期であるが、周知のように掘立柱建物は、厳密な意味での床面



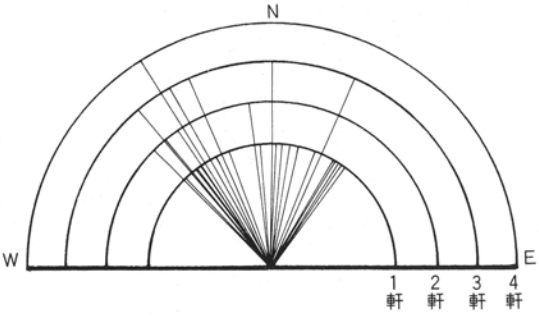
第２図　遺構全体図

の検出が困難である場合が多い。本遺跡においてもこれは同様で、床面検出の困難さから、明確な形で伴なう遺物を検出し得た建物は1棟も見られない。従って、これらの時期を決定するためには、それぞれの柱穴について掘り方部分と柱痕部分の出土遺物を比較する方法が最も有効になって来る。しかし、これらの柱穴埋土は、多くの場合出土遺物が少なく、たとえ検出しても細片が多いため、時期を決定する資料が乏しい場合が大半である。しかし、この作業の結果、細片の形ではあるが、平安時代須恵器・灰釉陶器を、いくつかの柱穴で検出でき、これらについては、確実にII期の範囲で理解することができた。従って他の掘立柱建物についても同様である可能性が大きい。次に、遺跡全体の出土遺物の量をI期とII期とで比較してみても、後者の方が圧倒的に多く、前述した竪穴住居の、極端とも言える数量差を考え合わせると、これらの掘立柱建物は、大半がII期に属するものと理解せざるを得ないという結論に達している。

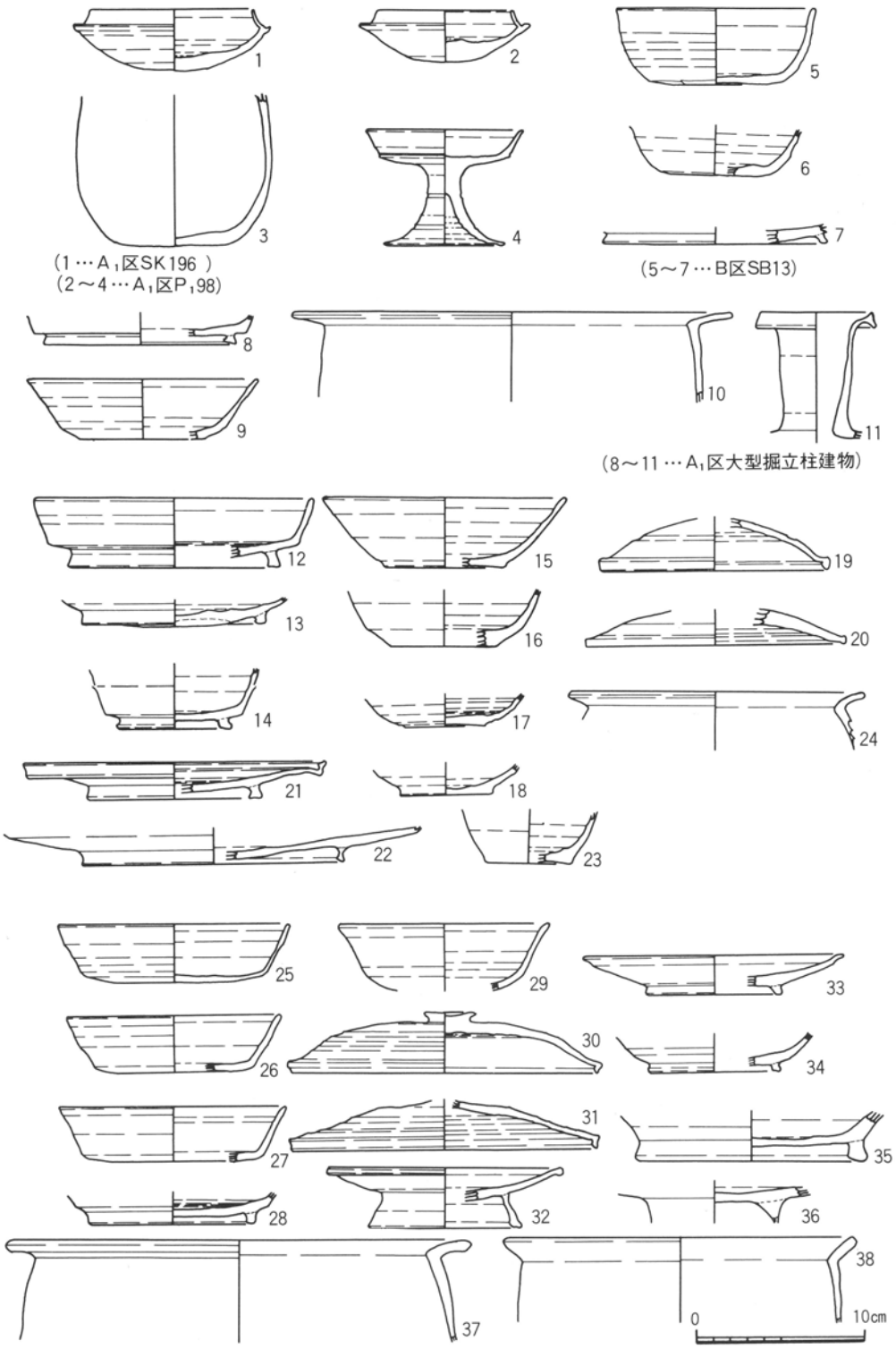
大型掘立柱建物（南より）

なお、掘立柱建物が竪穴住居と切り合う場合、ほとんど前者が新しいことを付記しておく。つまり、前述したように竪穴住居の大半をI期に属すると考えるならば、上記の想定と矛盾はしない。また、大型掘立柱建物の柱穴掘り方部分からは、II期初頭に属する遺物が見られ、（第3図－8～11）しかも、これらがいくつかの柱穴で接合関係を有することから、大型掘立柱建物の時期は、一応II期の初頭を考えている。

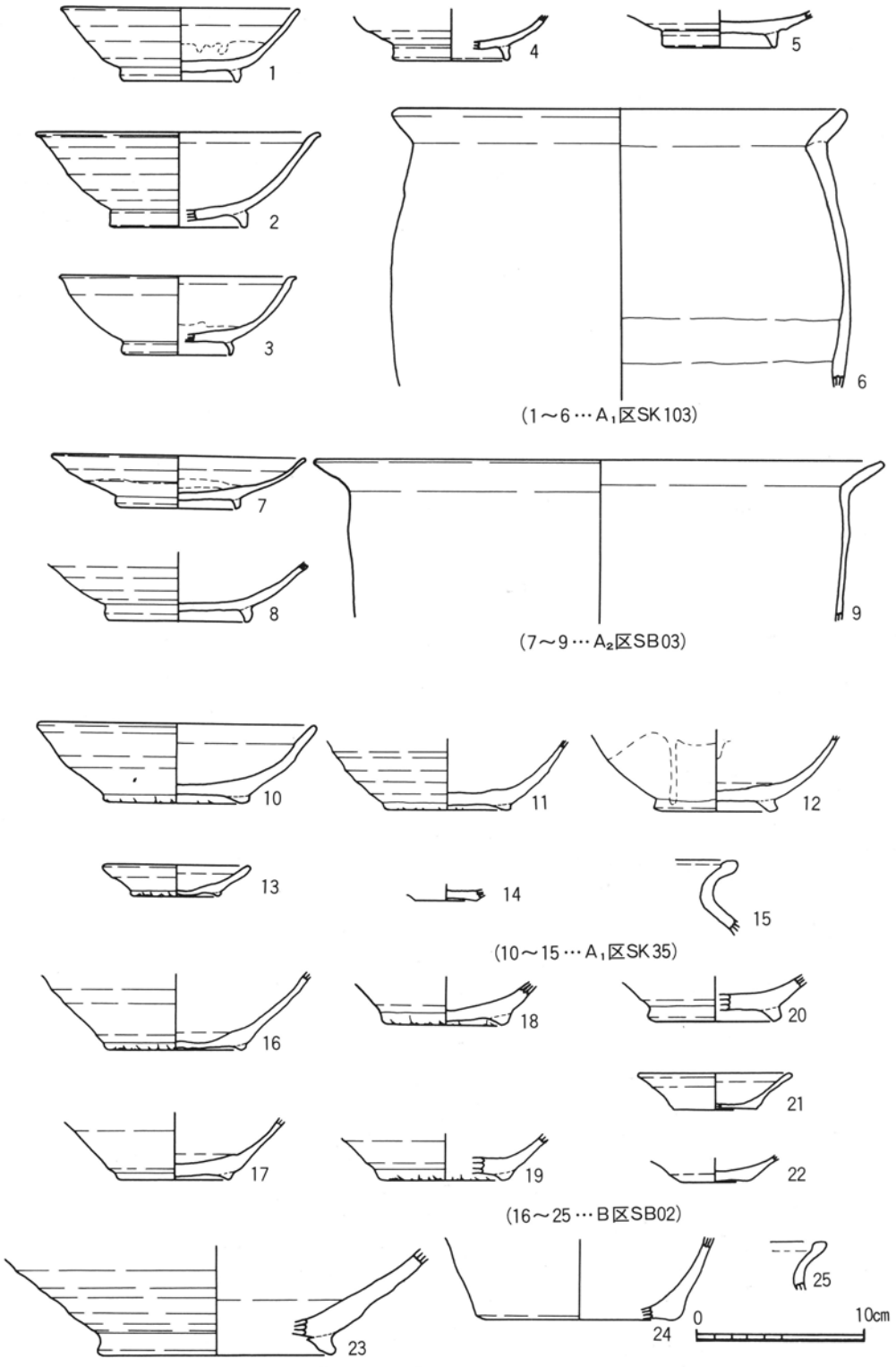
第3図は、今回検出された掘立柱建物の軸線を模式化したものである。図示されるラインの長さは建物数を示し、方位は真北を基準にしている。また、この表の示す方位は、南北ラインに近い軸線を用いたもので、必ずしも建物の主軸を表現してはいない。この表からは、今回検出した掘立柱建物が大きく四グループに分けられることを読み取ることができる。しかし、これらの差は明確なものではなく、しかも同一グループ内でも方位のばらつきを持ってい



第3図　掘立柱建物方位グラフ



第4図　志貴野遺跡出土遺物①



第5図　志貴野遺跡出土遺物②

る。従って、掘立柱建物の方位に厳密な差異を認めるためには、若干の検証を必要とするであろう。

なお、掘立柱建物の分布には、前述のⅠ期に属する竪穴住居のような様相は見られない状況にある。これは、前述した方位によるグループのみを抽出しても同様である。

次に、掘立柱建物のうち、特異な構造を有している例について若干触れておく。志貴野遺跡では掘立柱建物のうち、床面の一部に土坑を有しているものが2棟検出されている。これら2棟はいずれもほぼ同様の構造を有している。注意したいのは床に設置されている土坑である。この土坑には、建物の外側に煙道を有するカマドが設置されている。土坑のプランは長径350cm、短径170cm程度の隅丸長方形で、面積は建物床面のほぼ1／4を占め、検出された床面より10cm程度掘り込まれている。建物の柱通りは悪いが、検出された2棟とも同位置に土坑を有すること、土坑単独では屋根構造も想定し難く、床面積も狭すぎることから、これらが一連のものであることは間違いあるまい。さてこの建物の機能であるが、前述した構造上の特色から、カマドを設置するための施設であったと考え、機能を想定できる掘立柱建物として注目したい。

3．遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器・陶磁器類・石製品類・瓦類などが見られるが、量的には、土器・陶磁器類が最も多い。ここでは出土遺物のうち、土器・陶磁器類のみを扱い主要な遺構に限定して概観する。

志貴野遺跡出土の土器・陶器類には、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・中国陶磁などが見られる。数量的には前三者が圧倒的に多く、後者二者は数点見られるにすぎない状況で、時期的にはほぼ古墳時代後期（Ⅰ期）とほぼ平安時代を中心とする時期（Ⅱ期）に大別できる。今回は紙面と時間の関係で、その詳細については遺物実測図（第4図・第5図）及び法量表に代えることとし、アウトラインのみを記したい。

Ⅰ期の遺物は量的に乏しいが、供膳形態を須恵器で煮沸形態を土師器で占める土器様相が想定できる。供膳形態の主体は杯で古墳時代的なかえりを有する有蓋杯（第4図－1・2）に加え、高台を有する有蓋杯（第4図－7）と、これに伴なう宝珠鈕を有する蓋などが見られる。煮沸形態は、土師器の長胴甕（第4図－3）である。

Ⅱ期に属する遺物は、志貴野遺跡の主体を占める。供膳形態は、須恵器のみで構成される段階（B区ＳＢ03）から、これに灰釉陶器が加わり（A_2区ＳＫ03）、主体が灰釉陶器化する段階（A_1区ＳＫ103－A_2区ＳＢ03）をへて、山茶椀に若干の土師器が加わる段階（A_1区ＳＫ35）へと移行する。煮沸形態は、Ⅰ期以来の長胴甕（第4図－10・24・37・38・第5図－6・9）が、Ⅱ期最終段階で伊勢型鍋と交代している状況である。

なお、貯蔵形態は、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて須恵器甕が主体を占めていると考えられる。

4．まとめ

以上見てきたように、志貴野遺跡の調査は、当地域における古代集落の一様相について提示し得たものと考えられる。今後、付近に所在する志貴野廃寺（西尾市志貴野町）・寺領廃寺（安城市寺領町）、羽角山古墳群（西尾市上羽角町・下羽角町）などの遺跡との比較を通じ、『墓』と『寺』のみに終始していた当地の古代について再検討を試みねばならない。

（池本正明）

番号	器　種	口径	底径	器高	備　考
第4図－1	須恵器杯	9.3	3.9	3.7	
2	〃　〃	－	7.3	－	
3	〃　甕	7.9	3.5	3.2	
4	〃　高杯	9.1	6.7	7.0	
5	〃　杯	11.4	5.0	4.5	
6	〃　〃	－	5.2	－	
7	〃　〃	－	13.0	－	
8	〃　〃	－	11.4	－	
9	〃　〃	13.6	7.6	3.6	
10	土師器甕	25.8	－	－	
11	須恵器長頸瓶	6.6	－	－	
12	〃　杯	16.2	6.0	4.1	
13	〃　〃	－	10.7	－	
14	〃　〃	－	6.6	－	双耳を有する
15	〃　〃	14.0	6.8	4.2	
16	〃　〃	－	6.3	－	
17	〃　〃	－	7.1	－	
18	〃　〃	－	5.4	－	
19	〃　蓋	13.2	－	－	
20	〃　〃	15.2	－	－	
21	〃　盤	17.8	10.0	2.2	
22	〃　〃	－	15.0	－	
23	〃　瓶	－	4.8	－	
24	土師器甕	17.2	－	－	
25	須恵器杯	13.6	7.0	3.5	
26	〃　〃	12.4	6.7	3.3	
27	〃　〃	13.2	7.0	3.3	
28	〃　〃	－	9.6	－	
29	〃　〃	12.2	－	－	
30	〃　蓋	17.8	－	3.6	
31	〃　〃	18.2	－	－	
32	〃　盤	13.6	8.8	3.5	
33	灰釉陶器皿	15.2	7.8	2.4	
34	〃　椀	－	7.6	－	
35	灰釉陶器長頸瓶	－	13.2	－	
36	土師器杯	－	－	－	ロクロ使用・小片
37	〃　甕	26.9	－	－	
38	〃　甕	20.4	－	－	
第5図－1	灰釉陶器椀	13.9	6.6	4.4	
2	〃　〃	16.7	7.8	5.7	
3	〃　〃	13.9	6.2	4.8	
4	〃　〃	－	6.6	－	
5	〃　〃	－	6.5	－	
6	土師器甕	26.4	－	－	
7	灰釉陶器皿	14.8	6.8	3.1	
8	〃　椀	－	7.8	－	
9	土師器甕	33.2	－	－	
10	山茶椀椀	16.2	7.8	4.7	高台モミ圧痕あり
11	〃　〃	－	6.8	－	高台モミ圧痕あり
12	〃　〃	－	6.4	－	高台モミ圧痕あり
13	〃　小椀	8.5	4.8	1.9	高台モミ圧痕あり 内底部墨書
14	土師器小皿	－	3.6	－	ロクロ使用・小片
15	〃　鍋	－	－	－	口縁部小片
16	山茶椀椀	－	7.8	－	高台モミ圧痕あり
17	〃　〃	－	7.0	－	高台砂圧痕あり
18	〃　〃	－	6.5	－	高台モミ圧痕あり
19	〃　〃	－	7.0	－	高台モミ圧痕あり
20	〃　〃	－	7.0	－	高台砂圧痕あり
21	〃　小皿	9.0	4.6	2.2	
22	〃　〃	－	3.9	－	
23	こね鉢	－	13.5	－	
24	壺	－	11.0	－	
25	土師器鍋	－	－	－	口縁部分

（数値はcm）

表1　出土遺物法量表